

ました。爾来二年数カ月間屈辱の抑留生活を送らされました。想い出しても不愉快でした。

復員は昭和二十一年十月です。

されど我が人生において二度と体験できぬ年月を過ごしたと、今しみじみと感じています。請い願わくば散華なさいました英霊各位の安らかに眠りあらん事を心より念じています。最後に平和の尊さ、有り難さを、かみしめて今日このごろです。

フィリピン・イポ山地

独立機関銃第十三大隊の最期

福岡県 丸山市 松

私は大正十二年四月十四日、筑豊の炭鉱町の生まれで、炭鉱の街を転々として、田川郡勾金村下高野（現在香春町下高野）に住み着いたのは、小学校二年生の時でした。父親は炭鉱気質で、お金の有るときは益か正月かといった生活でしたが、家の生活は毎日苦しい

ものでありました。小学生の私は母親を助けたいという一心で仕事場を探し、田川の宮尾炭鉱で炭車の油差しの仕事をしたりしたので、母親の生計の助けになったと思います。小学校四年生半ばまで通学しましたが、学校にも行けなくなりました。家族は両親兄弟妹六人暮らして家が貧しかったから苦労しました。

学校には行けなかったが、その当時、青年学校という制度があり毎週一日だけ通いました。昭和十五年数え年十八歳の時でした。青年学校三年生の私たちに先生が「お国のために、天皇陛下のために命を捧げる者はいないか」と言われ、軍隊に行く決心ができました。軍隊志願のことを父親に話したら、「それは駄目だ」と反対されました。父親の承諾がなければ志願できない。しかし、私は決心ができておりましたので、父親のいない日に印鑑を持ち出し、村役場に行き現役志願の届を出しました。役場の兵事係は何も言わず受け付けてくれましたので、同年、田川郡伊田町（現田川市）の小学校の講堂で身体検査を受け甲種で合格しました。

昭和十五年十二月八日、十八歳で、朝鮮平壤の第二

十師団、歩兵第七十七連隊に入営したのです。寒い北

朝鮮、しかも十二月ですから零下二〇度くらいで、九州生まれの私にとっては厳しい寒さでありました。入営者は皆、二十一歳の現役兵で志願兵は中隊で私一人だけです。中隊は機関銃隊で、九二式重機関銃の射手としての教育を受けましたが、満期まで他へ行かず本科だけでした。皆私より年齢が上で「お前は軍隊が好きで入ったのだろう。志願馬鹿」だとも言われ、進級も早かったから私的制裁も他の人より随分多く受けました。しかし、家を出るときは下士官志願のつもりでいましたから、若さと意地で頑張り、人事係准尉の伝令当番も命ぜられ、目をかけてもらえました。

歩兵第七十七連隊は鯉登連隊で「行けば白木の箱（遺骨箱）が待つ」と言われた有名連隊です。教育が終わってからは、三カ月の間に二回ほど鴨緑江の水豊ダムや砂金工場の警備にも行きました。また鮮満国境に近い所ですので、北鮮共産軍の金日成が地下に潜り活動して、治安を乱していました。これが威嚇のため師団挙げて冬期演習と称して出動したこともありまし

た。

満三カ年間には、満州、朝鮮を含んだ関特演（関東軍特殊演習）の大動員があり、昭和十六年十二月には大東亜戦争勃発、南方戦線の悪化等もありまして、いよいよ下士官候補志願の気持ちが強くなっていました。しかし、人事係の有川准尉から「こんなことは俺は言えないのだが、お前は長男で弟妹もいるから、下士候補をせず満期除隊をせよ」と諭され、昭和十八年十二月七日付けで下士官適任証をもらい、八日現役満期、福岡県京都郡今元村（現行橋市）へ帰郷しました。

昭和十九年七月二十五日、召集で久留米連隊に入隊、そこで独立機関銃第十三大隊（威一七六五二部隊）が編成されました。私の小隊長と指揮班長を除いて全員福岡県出身の召集兵だけでした。その中には四十歳を過ぎた私の親みたいな年配の未教育補充兵もおり、掌握するのに苦労しましたし、未教育兵は弾薬運びぐらいしかさせられなかったのです。

それより、重機一銃に対し弾薬二箱、千二百発しか携行させてくれない。終戦までこれだけですから、敵

が前にいるのに撃てなかった。実戦でも撃てなかったことは情けなかった。なにしろ千二百発の弾を重機では十分に撃ってしまうからです。

七月三十日久留米発、門司港着。五日間くらい民間の家に世話になり、八月五日ころ門司港を出航しましたが、長崎近海で輸送船のスクリューが故障し、長崎ドックに入り、一カ月ほどで修理が終わりました。十二隻で船団を組み再び出港、台湾の高雄に入港し、そこで水と食糧を積み込み、夕方出航しました。しかし、その夜、台湾近海で敵潜水艦の攻撃に遭い、真っ先に護衛の航空母艦に魚雷が命中しました。艦は最初に魚雷を受けた反対側に傾き、次に魚雷が当たった側に倒れ、アツという間に沈んでしまいました。

船団の半分以上が魚雷で沈没、中には流出した油に火がつき火の海の中で多くの人が亡くなったことですが、護衛の艦艇も皆分散し一時退避したらしく、しかも暗夜のこととて沈没船の人で救われた人が何人いたか分かりませんでした。敵潜水艦は、高雄出航の我が船団を待ち受けて攻撃したのであります。とに

かく、九月八日ルソン島のマニラに着いたのは二隻だったと聞きます。我々の船は右翼へ逃れたためか魚雷一発も食らわず、無傷で上陸しました。

取り敢えずマニラ市内の小学校に集結、マニラに駐留していました。その間マニラ大空襲がありました。会報で、「明日、陸海合同演習があるので飛行機が飛んで来るが心配するな」とのことでした。私は学校の窓に腰をかけ空を見ていましたが、なるほど沢山の飛行機が飛んできました。ところが、敵の飛行機で機銃掃射はされる、爆弾は落とされる、敵機が空一面に現れるという大空襲でした。我々の機関銃は撃つに撃てずで、日本軍は手も足も出ない先制攻撃を受けたのでした。第四航空軍やマニラ防衛隊は何をしていたのかと思いました。

十月末、軍命令により、ルソン島南部のバタンガスに一個大隊が一緒に移動、米軍の上陸作戦を阻止すべく陣地構築の毎日でありました。バタンガスは平地で砂糖黍畑、製糖工場のある所で、我々は壕と機関銃座の構築をしました。ところが更に転進命令により、マ

ニラ東方五〇キロのイポダムという水源地にいきました。この周辺の大草原で敵を迎え撃つべく再度陣地の構築をしたのです。そして振武集団、川島兵団の護衛を命ぜられました。

兵団では、九州から精銳部隊が来たと喜んでいましたが、護衛は機関銃第一中隊だけでした。昭和二十年一月一日我が第二機関銃中隊は花房連隊の指揮下に入っていました。そこでも陣地構築が続けられましたが、第三中隊はその後の戦闘で全滅し、現在生存者は一名だけとのこと、第三中隊の状況は分かりません。

我が小隊でも隊長戦死、私も第五、第六分隊の長を兼ねておりました。四月ころまでは米軍の砲撃の繰り返しました。朝八時ころから夕方まで、夕方になると米軍は安全な場所まで後退し、また朝になると砲撃が始まるという戦闘の繰り返しでした。なお、五月の初めころから敵の猛烈な空襲が続きました。

そのころ、ちょうど、米軍最高司令官マッカーサーがマニラへ着任して、マニラ市の水源地イポダム周辺の日本軍を攻撃せよと命令が出されたといえます。ダ

ム占領の目的は、戦後、昭和五十七年、厚生省の遺骨収集の折、厚生省の本峠さんが言われたのは、理由として、マッカーサーがマニラ市の水道の復旧を命じたから、だと聞きました。

四月中旬に中隊長より機関銃二個分隊で、イポ山系、神州山南麓の陣地を死守せよと命ぜられましたので、丸山分隊は第五、第六分隊同行で死守の任務についていました。マッカーサー命令は、川島兵団、花房連隊などの防衛するマニラ東北のイポ付近にさらに猛攻を加えることだったので。

イポ付近の日本軍が要所を確保している戦闘図によると、神州山、誠山、山神洞などへの配置状況が分かれますが、洞窟陣地も多数掘られており、米軍の空襲と圧迫により撤退を余儀なくされているのがよく分かります。

私の丸山陣地の第五、第六分隊の約二十二名は、五月十七日の午後四時まで頑張り、中隊命令「五月十七日午後三時、ただ今より直ちに陣地を引き揚げ、夜八時まで一カ月分の糧食を持って中隊本部に集合せよ」

により、八時前に本部に着いたのですが、中隊長以下全員は、私たち分隊を残し既に出発していました。

我々二十二名の二個分隊員は、私の指揮のもと一ノ谷から十三ノ谷までの山中へ入ったのですが、昼は敵の攻撃や空襲が激しいので藪の中にかくれ、夜行動するのでした。しかし、夜間山中を歩くので、兵隊の体が保てない。止むなく機関銃を分解して捨てようと、六分隊長に相談しましたが、彼は「陛下から預かった兵器は捨てぬ」という。私は「貴方は兵隊の苦勞が分からぬのか」と反論し、「自分は自分で責任を取るから」と言って分解し、川の中へバラバラにして捨て、「貴方は持つて行きなさい」といいました。

第六分隊では二日間くらい機関銃を持って歩いていましたが、その後、「ああ言つて悪かった」と言い、第六分隊の重機関銃も捨てました。そのとき、私は肚を決めていて、兵器を捨てたのだから、もし中隊と合流できたとき、銃殺刑になるのは確実と思っていました。我々は一ノ谷から直ちに十三ノ谷へは危険で行けないので、東側を抜けて山中に入りました。一カ月後

に十三ノ谷で中隊長に追いつくことができました。私は兵器を破棄したので罰を受けると思つて、拳銃を帯革に差していて、万一の時は中隊長と差し違えようとも思つていました。ところが中隊長から、二個分隊を置いて先行したことを自分から詫びられました。

間もなく兵団長命令が来て、十一月の山下軍司令官の反撃作戦までに北部ルソンの山下大将の元に行き、五〜六人単位の小人数でゲリラ戦を行えと言われ、北上命令が出ました。しかし、八月初めの時点で、我が中隊百人中、九十人近くの戦死傷病者が続出してしまったので、北上を中止し、以前の陣地に引き返せばドラム缶に糧秣を入れて埋めてあるから、それを夜間に取りに行こうと南下することに決定しました。

ちょうどそのころから、私はマラリア熱に侵され、ついに倒れました。そのとき、我が分隊は既に私以下五名になってしまいました。二日間、私の看病をしてくれましたが、私はこの時決心がつき、皆にこれ以上看病をうけ、ここに留まったら全員がこの地で戦死することになると思つて、「私のために迷惑をかけ、看

病してくれて有り難う、私を残して君たちは一足先にイボの陣地へ行ってくれ、私は熱が下がれば後から必ず行く」と礼を言いました。

ところが、その中の一人が「今まで我が中隊の兵士は一人も埋葬していない。ここで丸山班長を死亡させ、埋葬してやろうではないか」との話声が聞こえました。そのときは本当に有り難いと思いました。すると、当番をやってくれた人が「皆さん待ってください、丸山班長は気の強い人ですから必ず後から来る」と皆に頼んでいる声が聞こえました。皆は「丸山班長、南の方向に来れば必ずイボ陣地に到着するから、先に行って待ってます」と言い残して出発して行きました。

それを見送った私は、もう生きる体力もない、と思い、手榴弾で自決しようとしたのですが爆発しません。これは作り話のようですが事実なのです。もう一発持っていました。もう死ぬ気になれず、一日遅れで、フラフラと歩いて追及出発しました。山中の木の枝を見れば南の枝は長く伸びているので、これを頼りに歩いて七日目ころ、川で行水をしている人たちに会いまし

た。その人は禪をしているから日本人だろうと思いつ手を振りましたら、向こうも手を振る。川端へ行くと、浅い所を誘導してくれました。合流したら私を余りにも親切にしてくれるので、これは後で私を殺して食うのではないかと心中思いました。

相手の兵隊は、私の警戒心が余り強いようなので「貴方が心配しているのが目に見えて分かるが、夕方になれば軍使が帰ってくるから、明日の投降準備で行っているから、安心しなさい、貴方を殺したりはしませんよ」と言われました。その時は、他の同じ隊の仲間同志だが、私はただ一人だけで、やはり不安ではありませんでした。

翌日、私が他隊の下士官だから、白旗を持って先頭になり歩いて米軍の所へ行きました。米軍も親切に扱ってくれ、何もせず収容されました。そして武装解除され、九月十日午前収容所に集合させられました。

最初の労役は、マニラ市内の戦後の跡片付けを毎日やらされました。米軍兵が自動小銃を突き付けて監視の目を光らせる。フィリピン人は石を投げる。「お前

「私たちは明日死ぬのだから」と怒鳴り喚く毎日でした。

しかし、米軍は親切でした。この労役も敗戦国、敗戦兵士に対する一つの懲罰、報復でありましょう。敢えて甘受すべき立場であったのかもしれませんが。

次に山下大将の絞首刑の日のことです。我々は幕舎の中から外へは出されませんでした。四時ころでしたか、最期のお別れとして、皆で「螢の光」を合唱しお見送りしました。しかし、今現地にある山下將軍と、フィリピンの緒戦、バタン、コレヒドール、死の行軍の罪で死刑となった本間將軍との墓は随分差があり、山下大将の墓は小さく質素な石碑であるが、ここも今は観光ルートとして現地の人を潤しているのです。

私は、昭和二十一年九月八日、佐世保に着き復員、懐かしい故郷日本の大地を踏むことができたとき、初めて命が助かったのだと感じました。

それに引き換え、私の所屬した独立機関銃第十三大隊は、比島派遣軍直轄部隊として末期のフィリピン、ルソンの戦闘に参加したのですが、編制時の隊員三三

四名、戦没者三〇四名、生存者は第一中隊二四名、第二中隊四名、第三中隊二名となっています。

私たち昭和五十七年、厚生省のお手伝いとして旧戦場に参り、遺骨収集団に参加もしました。五十八年、御遺族と共に慰霊祭の挙行をさせていただきました。そのとき、参加された戦友の遺児古賀政信さんの、亡き父君を偲ぶ、切々たる文章を寄せられていましたので、掲載させていただきました。

また、高雄港出航の同じ船団の沈没船舶犠牲者の御冥福を併せて祈ります。

慰霊巡拝をされた古賀政信さんは次のように述べられています。

『父終焉の地、フィリピンのイボを訪ねて』

「私は父を知らない。物心つく頃から戦争で死んだと聞いた。

戦後三十八年：私は今一男一女の父親である。異国の地で母妻子を想いつつ、戦いに敗れ、三十一歳の若い肉体を南国の灼熱の太陽と、果てしなき密林

の中に捧げ、今も眠る父に会いたいと思った。

そして、異国の地に立って父と同じ想いをし、涙
したいと思った。

それが、子としての務めだと思うから。

政信」

『また、フィリッピンを去る時のメッセージ』

Par Lam Philippines

パールム（さようなら）フィリッピン

「父の眠る地 イボに卒塔婆を立て ローソクに

火を灯し、線香を燃やし、母が持たせてくれた日本
酒とビールとお茶と水とお菓子とうめぼしを供えた。

また、比島寺では、永久に残る大理石に、父の名前
が彫られ、父の魂は慈母観音様に抱かれて、安らかに
眠っている。

日本とフィリッピンの人々に残した戦争の傷跡は
両国が在る限り癒えないかもしれないが、それを温
かく包むのもまた両国民であることも知った。それ
は一時ではあったが、フィリッピン人のカメラマン
「アトさん」とガイドをしていた「ヴェリー

さん」の心情に触れることが出来たからであろう。

空から眺めるフィリッピンの地は、三十八年前、
人間が死を決して戦った地とは思えないほど緑美し
く安らかな平和な南の島である。しかし、涙がとめ
どなく流れるのは何故だろう。あと数時間もすると
妻子待つ日本へ帰れる。やっぱり日本は素晴らしい、
そう思えば思うほど涙がこぼれた。それは、父の死
んでも死に切れぬ望郷の念に触れたからであろう。

最後に今回の慰霊巡拝をお世話いただいた戦友の
小瀬木さん、丸山さん、堤さんに心からお礼申し上
げます。

そして同行された遺族の方々の御健勝を祈念いた
します。

いつの日か子供たちがこのアルバムを見て肉親の
尊さを知ってくれたらと思う」